



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「倫理をつくる」：「現場主義」の立場から
Author(s)	上村, 崇
Citation	応用倫理, 7, 39-43
Issue Date	2013-10-01
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.7.39
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60934
Type	departmental bulletin paper
File Information	no7_06uemura.pdf



題にしか関心がない学生、現実的な応用倫理的な問題への関心は強いが、メタ倫理学等にはあまり関心ない学生と三種いるが、後者の二種の学生の姿勢も肯定したいと私は考えている。

「倫理をつくる」——「現場主義」の立場から

上村 崇（福山平成大学）

はじめに

奥田太郎の『倫理学という構え——応用倫理学原論』は、「倫理学とは何か」という哲学的な問いから倫理学の「方法論＝構え」を検討し、「倫理学をつくる」こと、「倫理学をつくる環境をつくる」ことを提示した野心作である。冒頭と末尾に掲げられた「倫理学という構えとは、倫理学をつくることである。そして、そこにこそ、応用倫理学をする理由が存在する。思慮ある傍観者たれ。」という言葉は心に響いた。倫理学の問題群として応用倫理学の分野で取り組まれている事例や倫理学理論を丁寧に、そして簡潔に紹介するだけでなく、生命倫理学の方法論争や、常識と直観に関する専門的な議論が繰り広げられており、読者の知的探究心を満足させるとともに、倫理学への視野を新たに開いてくれる。さらに、奥田のこれまでの研究活動と問題意識から展開される議論は、読者の倫理的な立場を問うものであり、この「問い」を引き受けることは、倫理学という分野に多少なりとも棲家を求めてきた人間にとっては、自らの倫理学への取り組みに「応答すること＝責任」として立ち現れることになる。「自らが語りかける読者との対話をこそ自らの糧」（236頁）とする「エッセイ」という方法は、本書において十分に機能しているように思われる。本書を書評するということは、自らの倫理学への取り組みを自問することに他ならない。ここでは、奥田が示した「構え」に対して自らの構えを提示することで書評としたい。本書を紐解くことで知的探究心が大いに満たされたことは前述の通りである。しかし、本書を読んでわたしは「違和感」を抱いた。この違和感をまずは明確にしていきたい。

違和感（1）「入門書」としてのハードルの高さ

私が最初に抱いた違和感は、本書が想定する読者である。奥田は、本書の読者を「倫理学について真剣に考えた末に改めて再入門したいと思うことのできる知的探求者」（ii頁）と想定している。「倫理学が取り組みうる問題に哲学的な面白さを覚える」（iii頁）読者に対して、人類の「知的遺産を前にした倫理学者がとるべき（と私が考える）知的態度、構えの提示」（同上）が本書の目論みである。私自身が（再）入門を許されるかどうか心許ないが、倫理学を専門的に学ぶ学生の講義を担当していない私には、こうした知的態度を持ち合せている学生を見つけることは非常に困難である。本書は、倫理「学者」や、倫理学者の「卵」に向けて書かれたエッセイである。もちろん、初学者でも分かりやすいように議論が整理されている工夫は認められるが、「倫理学を生業としている」（3頁）奥田が個人的に抱く問いから議論が展開されているので、それは当然であるように思われる。

違和感（2） 専門家の対話から成立する倫理学？

奥田は「己の足場にとどまりつつそこに精神的に安住しない状態を維持する」「バランス感覚」（4 頁）、「高度な議論と下世話な関心を往復する知的体力」（11 頁）の重要性を説く。こうした往復運動とともに、固有の研究領域に赴くのが「倫理学者」とであると奥田は言う。「倫理学無用説」と「倫理学有用説」の議論は、奥田の多領域にわたる研究活動のなかで「倫理学者として」自らに問い続けた問いであろう。学際的な研究活動のなかで倫理学を研究している者の発言がどのような意味を持つかという問いは、学際的な研究をする倫理学者が何度も自らに問いかける問いの一つである。しかし、ここで私はもう一つの違和感を抱く。ここでの奥田の議論は「倫理学者 vs. 技術者」というように、自らの学問の「有用性／無用性」の問いを専門家と倫理学者（という専門家）との対話に限定している。こうした違和感は奥田が取り上げる「現代社会における倫理問題群」において決定的となる。私が「現場」として関わってきた教育倫理が抜け落ちているからである。

倫理学をつくる vs. 倫理をつくる

応用倫理としての教育倫理はいまだ発展途上にあり、倫理学者がどのように関わってきたのかという「知的遺産」が豊富とは言えない。また、教育現場は教育の「専門家」である教師だけではなく、生徒・児童・学生という存在とともに構成されている。教育の非専門家である子どもとの関わりが本質である教育現場において、教育倫理はつねに専門家外に開かれた研究領域でなくてはならない。確かに奥田は応用倫理の分野を紹介するにあたり、応用倫理の問題群が私たちの生活領域と密接に結びついているという指摘を怠らない。しかし、「教育」が「子ども」とともにあり、「医療」が「患者」とともにあり、「科学技術」が「生活を営む人びと」とともにあると考える私からすれば、専門家内に限られた倫理学の有用性に関する議論にリアリティを感じることはできない。もちろんここに倫理学を研究する者としての私の政治的な立場が色濃く反映されているのは事実である。奥田が「思慮ある傍観者」であることを表明するのも一つの政治的立場なので、ここで私と奥田の立場は決定的に袂を分かつことになる。奥田は「倫理学という構えとは、倫理学をつくることである。」（傍点引用者）と表明する。私はこの構えに異議を申し立てたい。むしろ、「倫理学という構えとは倫理をつくる」ことではないか。以下、この異議申し立てについてわたしが現場に赴いた経験をふまえて述べていきたい。

倫理をつくる（1） 規範の対立構造の明示とその分析——学校教育現場から

学校教育現場をととして「倫理をつくる」ということについて考えてみたい³。私がいわゆる「問題校」といわれる教育現場で高校生に個別インタビュー調査を実施したところ、子どもたちは「友人関係を維持する」という規範は肯定的に捉えているものの、ほかの規範に関しては無頓着であることがわかった。「なにをすべきか」、「なにが不正か」と問うよりも、「いま友だちと楽しければそれでよい」という思考停止状態に子どもたちは陥っている。こうした思考停止状態は教師に

3 以下の学校教育現場に関する議論は、下記の論文をもとにしている。

上村崇「モラルの育成を阻む無力感」越智貢編『教育と倫理』ナカニシヤ出版、2008 年、9-35 頁。

上村崇「学校教育における倫理学的アプローチの可能性——高等学校での取り組みを通して」『社会と倫理第 22 号』南山大学社会倫理研究所、123-130 頁。

もみられる。教師は子どもたちの問題行動に対処するためにその場限りの教条的な生徒指導をする。教師も、本当はそのような態度をとりたいわけではない。保護者の要望は、「勉強だけ教えておいてほしい」、「生活習慣までしっかりしつけてほしい」など多岐にわたる。生徒の問題行動への対処や日常の職務に追われるなかで、保護者の要望にすべて応えることはできない。そうしたなかで「やむなく」子どもに対しては教条的な生徒指導に終始してしまうのである。このような学校教育現場では、規範に関わる言葉は力を失っている。お互い、いつもの「しかる」「しかられる」という関係性のなかで言葉をやり取りしているだけである。こうした現状に対して、教師が危機感を抱いていないわけではない。意識の高い教師は、指導書や専門書を読み、学会や講演会に通う。だがそうした努力は、日々の業務に忙殺されるなかで、「ちょっとした自分のアレンジ」を加えて実践されるのみである。こうした教師の教育実践で発せられる言葉が、子どもの心に届くことはない。

「倫理をつくる」とはどういうことか。教師と子どもの対立は、単なる「問題行動」では片付けられない位相が存在する。たとえば、「集団万引き」という問題行動を取り上げてみよう。万引きは窃盗という犯罪行為であり、不正な行為である。教師はもちろん万引きを「不正行為」として厳しく叱責したり、場合によっては停学などの処分を下す。しかし、子どもにとって万引きは不正行為でありながら「友だちとの関係性を維持する」というもう一つの意味を持っている。ここでは「友だちとの関係性を維持すべきだ」という規範と「窃盗をすべきではない」という規範の対立が存在する。しかし、教師も子どももこうした規範の対立を明確に意識することは少ない。「不正な行為をした」という教師と「友だちとの関係性を維持した」という規範の対立は言語化されず、「一方的に怒られた」、「話のわからない教師」という感情を子どもが一方的に抱くのみである。

「倫理をつくる」という言葉で私が意味することは、教師と子どもの規範の対立構造を明示化することで、倫理的問題を浮かび上がらせ、それぞれの規範に内実を与えるとともに、その規範内容を吟味していくことである。この際、規範や倫理に関わる思考を鍛錬している倫理学研究者が果たしうる役割は大きい。「どちらの規範を優先すべきか」という問いから始め、「どうしてその規範を優先すべきなのか」という根拠を問う過程を共に経ることは、心情主義とは異なった合理的な思考にもとづいた道德教育として結実する可能性がある。

倫理をつくる(2) 現場で行使される暴力の構造化とその分析——上関・高江の現場から

「倫理をつくる」についてもう一つの側面をみるために私が関わっている別の「現場」に話題を移そう。それは上関の原発建設予定地の対岸に位置する「祝島⁴」とヘリパット建設に揺れる沖縄の「高江地区⁵」である。こうした現場に関わったきっかけは、学問的な問題意識ではない。祝島出身の広島で生活している女性と知り合い、さらに鎌仲ひとみ⁶、瀬戸あや⁷といった女性映像作家

4 反対運動の経緯については、「祝島の島民の会ブログ」<http://blog.shimabito.net>を参照。

5 反対運動の経緯については、「やんばる東村——高江の現状」<http://takae.ti-da.net>を参照。また、琉球朝日放送が制作したドキュメンタリー番組「標的の村——国に訴えられた東村・高江の住民たち」は高江の現状を克明に映し出している。<http://www.qab.co.jp/village-of-target/>を参照。

6 ドキュメンタリー作家。『六ヶ所村ラブソディー』(2006)、『ミツバチの羽と地球の回転』(2010)、『内部被爆を生き抜く』(2012)などの作品を監督。『内部被爆を生き抜く』の公式HPは、<http://www.naibuhibaku-ikinuku.com>。

7 ドキュメンタリー作家。祝島の上関原発反対運動を描いた『祝の島』(2010)が初監督作品。

と出会い、彼女たちの映画を上映しながら人びとと語り合ったことが祝島と私との関わりの始まりであったし、高江在住であった映像作家、比嘉真人⁸と出会い、「高江に一度きてみてほしい」という言葉から高江に赴いたのが高江と私との関わりの始まりであった。私がこうした人びととの関わりを強めたのは、「広島は国際平和文化都市と標榜しながらも、近隣の山口県の基地問題や原発問題、あるいは沖縄の基地問題に無関心である。広島はそれでいいのか？」と問われたからである。私が現地に赴いたとき実際に体験したことはないが、住民や映像作家によって記録された住民と電力会社、あるいは住民と防衛局との衝突から感じたのは、「意見の対立」などではなく、防衛局や電力会社から住民への一方的な「暴力」であった。住民は電力会社や防衛局と粘り強く対話の機会を求め続けているにもかかわらず、防衛局や電力会社は一方的に基地や原発の建設を始めてしまった。「第一次産業で生活していけると思っているのですか」と電力会社から一方的に断罪の言葉を浴びせられる祝島の漁民たち。辺野古の基地移設については関心を持つ沖縄県民の協力さえ得ることが難しい高江。こうした状況を私は悔しいと思う。そして憤る。もちろん反対運動をする住民たちも憤っている。しかし、住民たちは、憤っているだけではない。お互い生活を犠牲にしながらも、時には冗談を言い合って励まし合いながら、粘り強く反対運動を続けているのである。しかしマスメディアを通して報道されるのは、反対運動で大きな声を上げている「怖い人たち」である。現場からの報道は、反対住民の人間性を捨象してしまうのである。上関原発の建設は現在停止しているが、高江ではいまでも「高江に座り込みに来てください。人が足りません」という言葉が毎日インターネットから流れてくる。私の憤りは、「座り込みにきてください」との声に耳を塞ぎながら日々の生活に忙殺されている自分自身への憤りでもある。

反対住民の憤りを言語化することが倫理学に携わる者の仕事であるというつもりはさらさらない。ただ、マスメディアを介さずに現場から届けられる暴力に苦しむ声を、「不正が行われている」倫理的な問題としてきちんと構造化することは倫理学に携わる研究者の仕事ではないかと私は考える。

「思慮ある傍観者」問題——倫理を考えることは知的遊戯か？

現場で行使される暴力とそれに対する憤りに奥田の「倫理学の構え」はどのように応えるのであろうか。奥田の表明する「思慮ある傍観者」は、メディアの視聴者とどこが違うのであろうか。本書を読了して深く私に残った疑問はそこである。こうした現場には奥田の知的体力によって全体を俯瞰する倫理的な方法論も知的遺産も存在しない。奥田は「義憤産業」としてのマスメディアを取り上げている（119-120 頁）が、マスメディアの義憤は教条的な言葉であり、自分の感情や思いのこもった言葉ではない。ニュースキャスターやコメンテーターは、メディアに通りのよい言葉（感情）を吐き出しているにすぎない。圧倒的な暴力が行使される現場で住民が叫ぶ言葉は、生活と感情とそれぞれの思いのこもった言葉である。もちろんこうした言葉がメディアに乗るときは、編集により切り刻まれた声として再演出されるのであるが、奥田が言及する義憤産業としてのマスコミやマスコミに煽動される愚かな大衆とは異なった義憤が現場には存在する。こうした感情そのものを奥田の構えは捨象してしまう。奥田は、「現実の諸問題に向き合い倫理を剔出す

8 映像作家。『やんばるからのメッセージ』（2009）。10 分バージョンの作品が Youtube で視聴可能 (<http://www.youtube.com/watch?v=5sS7aesBipU>)。

る際に依拠されている議論の枠組みや基本的な思考の方向性を明らかにすることこそが、倫理学に固有の仕事なのである」(186頁)と述べる。ただ、つづけて奥田は「倫理学に真っ当に取り組むためには、まずもっていわゆる応用倫理学の問題圏に触れていなければいけない」(同上)とも述べる。しかし、「応用倫理学」が既に学問的な方法論を確立している学術的に豊かな領域でしかないとするならば、私がこれまで言及した現場の問題や義憤という感情は応用倫理学から、そして倫理学からもこぼれ落ちてしまうのではないか、という危惧がある。奥田の構えは、豊かな学問的方法論を「文献というメディア」を通して受け取りつつ、現実の倫理的問題群と理論の往復をはかるものである。その構えを自覚し、奥田が実践してきたことには尊敬の念を抱くが、奥田の表明する「倫理学をつくる」という態度は、どこか知的遊戯でしかないようにも思える。私の構えは奥田とは異なる。私の構えを奥田の「問題フレーミング」という言葉を借用して説明すれば、「倫理をつくる」とは倫理学において自らの政治性を認識して引き受けるというよりは、倫理的な問題をフレーミングする政治的な営みを現場のなかで実践するということである。

おわりに

私の倫理的な関心は、被差別部落や在日朝鮮人の友だちも「私たちと同じ人間で平等である」と述べた教条的な道德教育の授業内容について、「そんなきれいごとを言うな!」、「そんなこと授業で言っても何も変わらないじゃないか!」と憤ったことに端を発する。教師は、そうした友だちたちが生活を営むなかでの困難を思っただけでそのように述べたのだということは今ではもちろんわかる。しかし、そうした友人の生活を営む困難さをなんとかしたいができないもどかしさが、私の心のなかに澱となって積もっている。それが、今も倫理学や道德教育に関わっている私の実存的な理由である。この思いは、沖縄や上関の人びとに対するもどかしさでもある。それを応用倫理学として学術的に昇華できていない現状は私の怠慢である。ただ、学校であれ、上関であれ、沖縄であれ、そうした人とともにあるという思いは忘れない。それは、私が教育問題や原発問題や基地問題の「直接の当事者」であり続けているという自覚である。「直接の当事者」たる自覚とは、ある問題群への特権性を手に入れるというよりは、否応なく現場へと巻き込まれる「構えなき構え」と言いうるものである。現場に巻き込まれるなかで紡がれる言葉のなかにこそ、「倫理」の可能性を私は感じる。奥田とは違う倫理の可能性を自問する機会を与えてくれた本書に感謝を捧げて私の書評としたい。

憤り —— 一つの可能な倫理的態度としての

神崎宣次 (滋賀大学)

最初に断っておかなければならないが、評者は既に本書の書評を関西倫理学会機関誌『倫理学研究』にて公表している⁹。そのため本稿では本書全体に対する評価を述べるかわりに、本書の基本的メッセージに深く関わると評者には思われるにもかかわらず、本書の著者(以下、奥田と表

9 第43号、182-186頁。